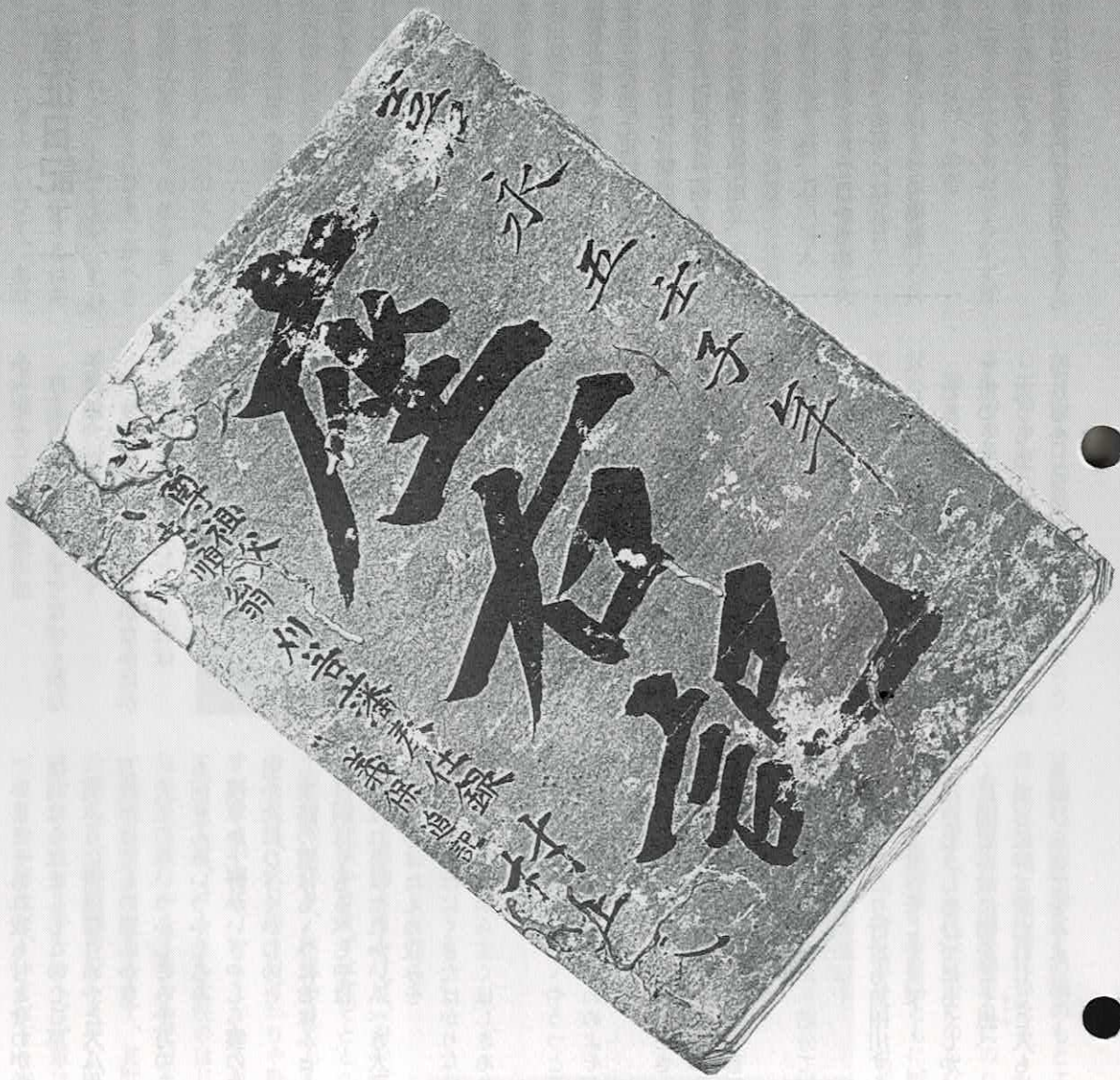
村上忠順翁顕彰会報



目　　次

- 東征日記下 …… 1
- 平成学びの足あと…五つの「栞」…… 5
- 歴史探訪記…… 6
- 表紙のことばにかえて…… 7
- 編集後記…… 7

村上忠順翁顕彰会報
第　5　号
編集　村上忠順翁顕彰会
事　務　局
発行　平成6年2月20日

続「東征日記下」

前号（第三号）のあらまし、

慶応四年（一八六八）三月二十一日、忠順は刈谷藩へ次のように願書を出し、翌二十二日に駿府へと発足した。

「私義不存寄大総督　有栖川宮様より御用之義有之趣ニ而被為召候間急速駿府御本陣迄罷出候様御達ニ付右御用済迄御暇頂載出仕度奉願候此段不苦思召候者御家老中迄被仰上可被下候以上」

二十五日には駿府に着き四月十五日に江戸西ノ丸入城、六月朔日江戸出立、六月八日刈谷着となる。

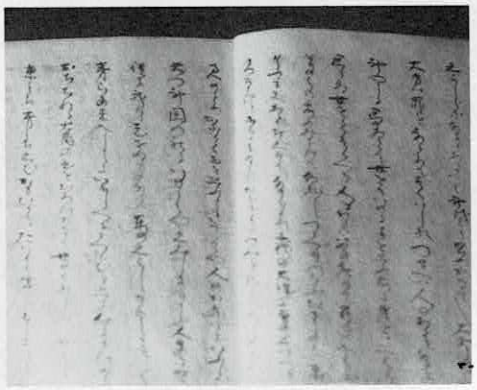
東征日記下は、江戸に入ってからの五月九日から始っている、前号には五月二十一日の半ばまでを掲載した。

前号よりつづく

草のはの露ふみわけて朝な〳〵つかへまつらふ武蔵野の原

けふも又あた打えずてなげくかな千代田大城に物思ひつゝ

かつきけどにくゝも有かなかにかくにつみを犯さぬ人しなければ



君のためかにかく物を思ふとも

しらでや人のおぞしといふらむ

天つ神国つ社にいのらばやえみしにまどふ人多き世を

徒に我身老せぬものならば東のえみしとくうたましを

夷らの来入しからにいにしへにかへらむと思ふ心たがひぬ

おちちれる火筒の玉をひろひおきて世のくなたぶれ打はたさばや

東うち夷うちえむおもひがねたばかり事をしるよしもがな

いまこそあれ我も廿とせわがからは刈はらはましこのしこ草

夷ぶりに世はなりぬやと大八州万代かけてもの思ふかな

大王のみいつかしこみ千万のあたも何せんみいつかしこみ

浅草か上野かいざやしら雲のたな引かたにひゞくかねのと

東路の雲はもゝへにおほふとも天つ日嗣はくもるべしやは

あはれとはたれかいふべき大御国なげく心はたえぬ我みを

あつまればにくきたばかりなすといへばいよゝからまくほしきあたかな

あたやよするひづゝやうつと五月雨のよるはすがらにいねぬよぞおほき

あづまなるみなのやつこをきためずはかへらむものか大君のため

暁のねざめなりともつゝの音に驚かされておどろくなゆめ

東ぢのおどろからたち踏分て世にまつろはぬ人きためばや

夷らにごり行世も角田川すみかへるべきせゞをこそまて

江戸もうしあひづにもくしかにかくに国思ふ故に物をこそ思へ

夷らに酔てまたれしこ人も活たる眠ひらきてをみよ

おぞき身もしれたる心ふりおこし千々に思ふも我君のため

思きやみこにつかへて武蔵野の草葉の露に袖ぬれんとは

思きやたちぬく事もしらぬ身の東うつべく出たゝむとは

思ほえずふた月み月くれにけり君につかふる武蔵野の原

老らくの我白かみを角田川すみに染てもつかへまつらん

角田川墨なす水にあらふとも濁らじと思ふ我心かな

日のみこの光さやけみむさしねに立おほふ雲もえこそかくさね

角田川すみなす波の立ゐにも東えみしを打んとぞ思ふ

日の本の国つ神風吹たちて夷の手ぶりしぞけやらなむ

国のため捨てかひある身なりせば老の命はをしまざらまし

世の中にあひづとく川なくもがな千代もといのる大王の為

とく行てつきおどろかせ土蛛のこもる上野の夕暮のかね

古郷も妹もわすれて武蔵野にまよふ此身はたゞ君のため

武蔵野に茂るしこ草たが世にか君にいむかふ種をまきけむ

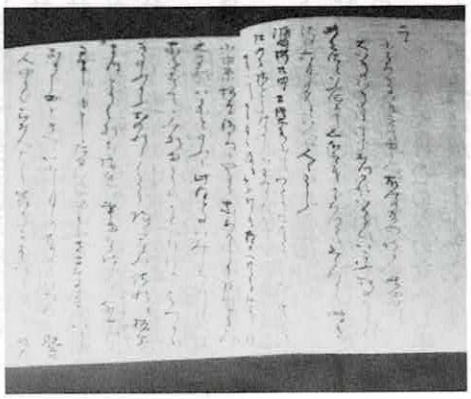
つかふべき道はかはらず武蔵野の原の小草の数ならぬ身も

君のためみこの為にとぞ人も千々
に物思ふ江戸の大城に
品川に響きわたるもおどろかず耳
になれたるかなづゝの音
大神もしろしめすらむ狄うたむ外
には又も心なしとは
ともすれば佞人らにまどはまし大
和魂かためおかずは
たま〳〵にますらたけをと生れ出
て大和魂かためざらめや
わが屍千代田大城にさらすともみ
このみことは守らざめらや
君がためあかき心は天地の神こそ
しらめ神はしるらん
廿二日。小雨ふる。
廿三日。晴たり。あつし。小田原の
かたへ伊因備の兵をくりいだす。
廿四日。蚊帳の中に女のゐるうたに、
夕霧のたえまの花のこゝちして
ほのかにみるもゆかしかりけり
人しれずをらまほしくぞ思ほゆる
よその垣根の姫ゆりの花
廿五日。父君にをしみなへしとたも
の酒など奉りて、
むかし君折けむのべの女へし手向
るけふは露けかりけり
はやくより、いくたびも、かへら
ん事をねぎつれど今しばしとて、しひ
てとゞめたまへるを、このごろはあ
つさにたへがたきよしいひて、あな
がちにこひぬれば、けふなんからう
じてゆるしたまふとて、くさ〳〵た
まものあり。大原卿にわかれをつぐ。
御まな料三百疋たまはれり。
廿六日。暁がたともしびをかゝぐと
て、
よな〳〵になれにしものを別ぢの
泪にしめる灯のかげ常にすみし所の
障子にかきつく。
すみすてゝ立別るとも君が為千代
田の大城千代に八千代に
廿七日。人々にわかるとて。
秋たゝば今うつりこむ物ながら別
るゝけふの袖のつゆけさ
二重橋までおくり来れり。夜、本
通りすぎや丁山本屋市郎ヱ門にやど
る。
小田原の家老の首三級きりたりと
云。林正之助は湯本に去。
廿八日。島岡大蔵丞、上□□殿わか
れををしみに来たる。
あつき日の汗か涙か衣手のぬれに
ぞぬれしけふの別ぢ
又、板倉延太郎・三松二郎・丸茂
庫司など来たれり。夜まで酒のみて
わかれがたき事をのみいふ。
君が行別の涙人とはゞ汗とこたへ
て袖につゝまんといへり
さす竹の君もろともいでたゝばけ
ふの別もうれしからまし
廿九日。南新堀をとめ橋のもとより
舟にのりて、品川沖にいたる。
台場の辺に三川舟泰平丸にのりて
夜をあかす。こたび此舟にのらむと
するは、東海道・木曽路ともに賊兵
ありときゝて、かく思ひ立し也。

晦日。風南よりふけば、舟いださ
ず。いつばかりまぜは吹ぞととへば
土旦の半ばかり、秋風めきてふくも
のなれば、六月の十日ばかりや舟出
すべきといふに、いとをかしくなり
て、さては、けふなん土旦のはじめ
なれば、徒にかくてあらんは口をし。
品川に行てはからんとて、其問屋
の場にて、小田原のいくさはいかに。
猶行かふ人なしやといへば、軍はし
づまりぬべけれど、いまだ下り来る
人侍らず。くはしうはえしり侍らず
という。さらば、あすこそいでたゝ
め。舟はふようなりとて、泰平丸に
かへりて、とかくおきてす。
六月朔日。とくおきて、荷づくりし
て、小舟にのりて、品川につき、駕
の夫持夫などおほせて、いでたつ。
いみじうあつければ、やすらひ〳〵
行。賊の女の田草引をはじめて見る。
めづらしければ、
田草ひく処女の袖はしをれどもよ
そめ涼しき松のしたかげ
行々て、夕ぐれ、かどに蜩の鳴け
れば、
秋風はまだふかなくに蜩のなくね
涼しき松の村立
此あたり、松村忠四郎が支配所は、
旧制札をとりすてたるまゝにして、
新制札をかけざるはいぶかし。戸塚
宿信濃屋にやどる。
二日。
小よろぎにいそぎてゆかん故郷の
友や待らん妹やまつらん
大いそのいそぐものからあつけれ
ば幾度いこふ松の下かげ
鳴立沢といふ所にて、
心なき身にもあつさはしられけり
鳴立沢の六月の空
といへば、人々わらふ。酒匂河、
廿四日まで大水にてわたりたえたり

しを、官軍のために橋をかけたればわづらひなし。

酒匂川さかまく波もなにあらず橋のへわたるみ軍の徒



小田原、橘屋治ヱ門にやどる。家あるじも刀自もみえざれば、いかにととふに、此ほどのいみじきさわぎに、家をすてゝ、みなゆかりのかたへ行侍り。はつかに、きのふけふ、おのれらばかり帰りすみ侍れど、板敷までとりはなちたれば、事ゆき侍らず。なめげなる事はゆるしたまひねとわぶ。

さて、その軍はいかになりしかととへば、いにし月の廿日の日、いづれの脱走人やらむ、三百人ばかり筥ねに来つときゝて、我大久保氏の藩士あまたくり出して、いみじく戦ふに、利なし。とかくするほどに、廿五日にもなりぬ。江戸より官軍あまた来ませり。

酒匂川水まさりて、わたりたえたれば、川上はるかにまはりて、小田原につく。小田原人いたくさわぎてくのふ村・鬼久保村に立去ぬ。湯本に賊ありと聞えければ、大久保を先鋒として官軍すゝみぬれば、巳午の間二時ばかり戦ひて、賊伊豆のかなたへ去ぬ。此時、小田原の家つったふるかぶら矢をあまた打出しぬれどおほく松にあたりて、一つも賊にあたらず。賊は石間木蔭より打出たれば小田原勢十人即死、四十余人手を負ぬとぞ。廿六日、新屋にて又戦ふ。賊にげ去んとして、新屋と筥根の町に火をはなちて、伊豆のかなたへにげ去ぬ。此さわぎに、大久保氏はやつといふ所にさり、同北ノ方はすはの原なる宋清寺に立のく。

北ノ方は七月ばかりうむが月にあたれるを、此みだりによりて、とく生れたり。さて、いみじうなやむとぞ。猶廿八九日ごろ、處々にて二三人づゝ生擒にす。さて、因幡藩小田原城を守る。

備前・薩長・伊賀などもおほかりといへり。猶なにくれといへど、みなわすれたり。

三日。暁、小田原を立て、こまのつめ、山さきなどを過ぐ。

山さきの軍のにはを尋れば松に矢玉の跡ぞのこれる

松一本に矢十二本の跡あり。砲にあたりたる木々はかぞへつくしがたし。湯本に名だかき梅ありしも、やけたり。新屋・はこねなど、やけあとをみて、

〔余白アレドモ歌ハナシ。〕

ゆく〳〵

はこね山あぢさゐにほふ谷かげに涼しくも有か鶯の声

持夫らが汗ぞながるゝはこね山槙の下風涼しけれども

いはほにたばしりつきたる血、いみじうなまぐさし。屍を埋めたるあたりは、鼻をおほふに、猶くさし。原のすみだやにやどる。そがひのかたに、あまた火みゆるをとへば、新川にてむなぎとる也といへば、篝火をいかにととへば賎の男が川瀬に立てむなぎそるてふ

四日。柏原にて

かしは原沼水□□清けれどふじのたかねのかげはうつらず

ふじみ坂にて、

ふじ川を渡り来ぬればふじみ坂そがひの方に高ねみゆめり

くら沢にては、いさゝかみゆ。廿日山くづれにて、くら沢十二軒土中に埋る。人二人うせる。府中、尾張屋にやどる。

さよなかにわたりしくれば旅人の衣手さむしあべの川風

うつの山にて、

うつの山現か夢かおぼつかなねぶりの花はいまだねぶれり

大井川わたるほどより、いみじう心ちあしくてくるしければ、さやの山ことまちの神社など、むなしく見ぬ。ふくろゐ、芝松やにやどりぬ。

六日。きのふのなごり、猶くるし。天竜川の西塘四□五月十九月の洪水にきれて、又一つの川となる。田畑六万石ばかりつひゆといへり。中にも、二万石は甚しといへり。かゝれば、東海道は道たえたれば、大明神村といふ處より、小舟にのりて、賎が家ゐの軒した、薮かげなど、あなたこなたもとほりて、石田といふ處に舟はつ。それより、ゐなか道はる〳〵と過て、浜松にいづ。此間、五里余といへり。荒井の海も波しずかにて、夜に入て、吉田駅小田原屋にやどる。

七日。大屋川にて、例のえせ言いひすてしが、早うわすれたり。

かけ村といふ所にて、あは雪とうふ

とふ名物をたうべて、
六月のてる日に消ぬあは雪はふじのねよりや吹おろしけん
申の時ばかりに、堤の里なる□□につく。人々来つどいて、とかくいひのゝしる。
八日。刈谷に行て、とかく聞えあぐ。此夜、正賢も京よりかへり来たり、もろともに事なかりしをよろこびあふ。

＊

閏四月はじめつかた、西丸にてよめる
八隔せし（ママ）　我大王　高光る　我日のみこ　鳥がなく　東の国の舟はつる　江戸のしこ人　大王に　いむかひまつり　あしがちる　なにはの浦ゆ　逃水の　にげかへりぬと　かしこくも　聞したまひて　まつろはぬ国を治めと　おろかなる　人をやはせと　みこながら　まけたまへれば　月と日の　錦のみはた　右左　さゝげもたしめ　菊の花　匂へるみはた　春風に　吹なびかせ　国々の　軍あともひ　遠近の　軍引ゐて　ひむがしの、海つちをしも　はろばろに　下りたまひぬ　いせの国　桑名醜男は　いむかはず　城あけ去ぬ　むさしなる　江戸のまがをは　たゝかはず　水戸にしぞきぬ　然はあれどのこるしれ人　つくばねの　このもかのもゆ　からすなす　むれつどひつゝ　妹が紐　ゆふきをせめ　玉だれの　小山おそひて　一たびは　勝ほこらへど　二度は　えもかちあへず　月と日の　はたの光に　まなかひも（きえて）　みえずやなれる　からにしき　みはたの風に　耳すらも　聞えざるらし　ゆふきには　夕霧かくりおのも〳〵　かくろひふしぬ　小山には　山陰がくり　おのがじし　なびきかくりぬ　大王の　高き光に　日のみこの　みいつかゞやき　江戸城の　西の丸とふ　かり宮に　しましいまして　天のした　治たまひをす国をさだめたまふぞ　かしこかりける

五月二日、西ノ丸にて
大王を　あふげばたかし　日のみこを　みれば尊し　世の中は　かくぞことわり　我国は　これぞ道なる　天雲の向伏きはみ　谷ぐゝの　さわたるきはみ　此てらす　月日のしたは　天皇の　しらさん事は　ことさらに　言挙せずとも　人なみの　知べきものを　東なる　くなたぶれらは　君をしも　君としらずて　とく川の　いくさの君を　大君と思ひまどはひ　大みこと　かゞふりたまひはろはろに　下りたまへる　久方の　我日のみこ　へつ波　そちの宮をし　あたとのみ　思ひひがみていむかはむ　ことはかりごと　あしたには　いひとよもし　夕には　およづれぞする　いひとよむ　ひが言のみか　いひさわぐ　およづれのみか　錦ゑに　みかたをかき　なぞ〳〵に　とくべくものし　にひがたり

にひしらせすと　くさ〳〵の　書かきつくり　天皇を　欺まつり　日のみこを　まどはしまつり　かにかくに　いひまどはして　世の人を　たばかりぬれど　まさやかに　てらしたまへる　月と日の　錦のみはた　さゝげたる　大みいくさに　いむかふべしや
みいくさにいむかひまつるしれ人をとくしづめばやとくきためばや

五月の十日ばかり
むさしなる　江戸の大城に　ひまもなく　五月雨ふりく（ぞる）　時なくぞ
時鳥なく　五月雨の　ひまなきが如　ほとゝぎす　ときなきが如　あかねさす　昼はしみらに　ぬば玉の　夜はすがらに　さす竹の　君をおもひ　うつせみの　世人を思ひ　かにかくに　心をくまり　くまもおちず　物をおもへど　ものごとに　おぞきさがゆゑ　一つだに　思ひもえず　たまさかに　思ひうれども　まつり事　とる身ならねば　用べき　人だにあらず　然しあれば　物はおもはじ　思ふとも　かひなきものと　ひたぶるに　思ひやめども　国のため　君のみためと　こゝだくに　もひつゝをれば　ひねもすに　安き日もなし　よもすがら　うまいだにせず　時鳥　血に泣ぬれば　五月雨に　袖こそぬるれ　大夫と　思へるわれも　利心を　ふりおこしかねて　徒になげかひくらす　江戸の大城に　老ぬればかひなくも有か朝宵にきかみたけびて物を思へど

明治元年九月、行幸東京時作歌
安見しし　我大王の　天のした　八州の内に　国はしも　ここだくあれど　里はしも　こきだあれども　た

かしらす
山代の国　打日さす　平の宮は
山並の　めでたき国
川なみの　さやけき里と　宮柱　太
知たてゝ　千年あまり　おはしゝ宮を
明らけく　治まる御代の　はじ弓
の　元の年の　菅のねの　長月にし
も　大御鳳輦　よそひたゝして　東
ぢに　いで立ましぬ　久方の　都の
人も　天さかる　ひなの女も　足引
の　山にいでたち　いさなとり　海
べにつどひ　老人も　うなゐはなり
も　打ふして　いはひをろがむ　こ
ぐ舟の　七十のをみな　百たらず
八十の翁ら　こきだくの　あしをた
まはり　こゝだくの　くがねたまひ
ぬ　ま玉ぬく　屋張の国の　ひかる
神　なるみがたには　秋の田の　お
くてかりとり　まくはもて　いなほ
こきおろし　土うすを　引てまはし
て　とほみもて　よねぬかわかち
升にもり　俵にいだし　みたからが
辛き労き　かしこくも　みそなは
しつゝ　めでたまひ　かまけたまひ
て　百千々の　うましくだもの　み
てづから　下したまはり猶あかず
思ほしけらし　小山田を　四町たば
りぬ　たふれたる　しこつ翁も　愚
なる　ゐなかをとめも　泪おとし
よゝとなきつゝ　おむかしみ　をろ
がみまつる　あはれあはれ　しかの
みならず　みゆきぢの　道の行てに
立ませる　神の宮には　みてぐら
を　さゝげたまひぬ　とし久に　た
えし祭も　いにしへに　立かへらへ
ば　天つ神　よろこびまさん　国つ
神　うれしみまさん　天つ神　国つ
み神の　日の守り　夜の守りに　つゝ
みなく　事なくもなく　東の　京に
いまし　平らかに　平安の宮に
ほどもなく　かへりたまはね　徒に
おいづく我も　みかへりの　いで
ましたむ　しづたまき　いやしき
我も　かへりぢの　みゆきをがまん
国はしも　こきばくあれど　里は
しも　さはにあれども　ひむがしの
うへつ道なる　三川のや　かりや
の里に　住身こそ　うれしかりけれ
遠からば　いかにかものせん　へ
だゝらば　いかでをがまん　五十あ
まり　世にながらへて　けふにしも
あふぞうれしき　年はしも　あま
たあれども　月はしも　こゝだあれ
ども　明らけく　治るとしの　長月
の　けふにあはめや　老せざりせば
徒に老ぬるわれも天皇のみゆきを
ろがむ時にあひにけり
おいにてあるわが身もうれし老せ
ずはいでましをがむけふにあはめや
九月会津落城

こぐ舟の　名にしおひねば　めでた
くて　有にしものを　世の中は　し
かのみならず　めでたくも　あらざ
りけらし
とく川の　よしひさちふも　よく
久に　世をばたもたず
とく川も　とくかはらひて　濁た
る　流はあせぬ　松だひら　ひろや
すとふも　ひろく保く　国治めえず
まつ平　松にはあえず　平らかに
枯て亡びぬ　川水の　清き心もて
松のはの　かきはときはに　大王に
つかへまつろひ　民草を　なでお
ほしなば　いく千代も　すまゝし物
を　万代も　栄んものを　なにしか
も　濁はてけん　なにしかも　ほび
こりぬらん　かくしあれば　名にし
もよらず　しかあれば　名をなたの
みそ　世の中の人

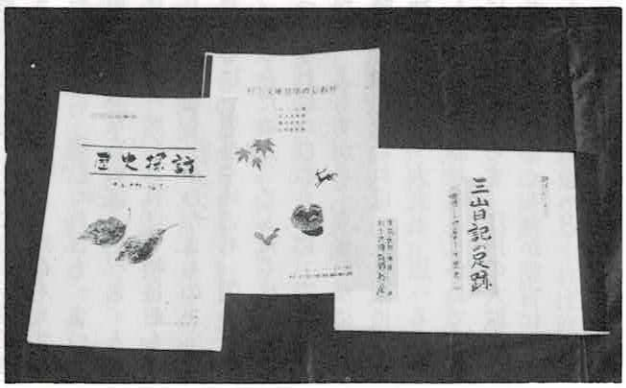
平成学びの足あと

五つの「栞」

当顕彰会は、忠順翁の顕彰と翁の偉業の研究や調査のため「忠順の足跡」をたずねる旅をつづけました。

毎回のテーマに従って出来るだけ多くの資料を集めて栞をつくりました。ふり返って見ると五部（冊）の栞が出来ていました。

それぞれに、それぞれの思い出が残されています。



歴史探訪記

歴史探訪も、回を重ね第五回を迎えました。

当顕彰会が発足した初年度から実施し、以来毎年度「忠順の足跡をたずねて」顕彰の旅をつづけて来ました。

第一回は、村上忠順集（紀行編）の中より三山日記をとりあげ、栞を片手に忠順の足跡をたどり、おにぎり持参の旅でした。

卯月ついたち八日の日の暁古郷をたつ

古郷の垣のうの花こころあらば
わがかえるさを待つけてちれ
忠順

天保十年（一八三九）忠順二十八才。宮路山、鳳来寺山、秋葉山の三山を巡る五泊六日の足跡でした。

第二回は、忠順との出合を求めて刈谷市中央図書館の「村上文庫」をたずねました。村上文庫では、司書の平野さんより親切な応対と説明を受け、その上忠順直筆による幾冊もの書にふれる機会を与えて下さり、会員一同深い感名をうけ、忠順を偲びながらうなずくことしきりでした。

尚、合せて常滑焼と杉本美術館の見学を行ない印象に残る一日でした。

第三回は、忠順の足跡と塩のみちをたずねました。

九久平より足助街道に入り飯田街道を北に向いバスを走らせました。

予定どおり稲武の古橋懐古館に着き見学をしました。ここでの目的は忠順の足跡を確認することでした。

やはり古橋家の文書の中に村上忠順が宿泊した記録があり忠順の足跡を確認することが出来ました。

幕末、勤皇、国学者……忠順の目的は何んであったか、今後の調査の課題でもありましょう。

下伊那の大川入山の近くまで足を伸し矢作川の源流を訪ねました。

往復四十五里（一八〇キロ）の旅でした。

第四回は、忠順集（紀行編）の中で最も身近で最も親しみのある地名が多く記されている「厚田記行」をとり上げて、その足跡を短歌とともにたどった熱田路の旅でした。

八事山興正寺女人禁制と書る石あり

ないりぞとしるしたてたるかひもなし姫ゆりにほふ八事山かな

有松にて

花もみぢゆはたに染て春秋をひとつに見するありまつの里　忠順

合せてNHK信長オープンセットの見学も行ない歴史セミナーの旅でした。

第五回は、私たち顕彰会がどうしても尋ねて見たい候補地の一つが今回の旅でした。

今回の旅は、忠順集にはなく、したがって現在村上家に保存されている多くの日記の中にも見当らないものであります。

以前から村上家に遊女桜木という人の短冊や手紙が保存されていることをおぼろげに知らされてはいたもののこの分野の調査や研究には全く手がつけられていませんでした。

一九九二年、桂書房発行「江戸期おんな考」に島原「輪違屋」の遊女桜木について、と題しその論文が発表されました。これは大府市の矢萩美也子さんの熱心な調査によるものでありました。

当顕彰会にとってこれほどうれしいことはありません。

この序文の中で「……私たちは今遊女自身が書いたものをどれ程目にすることができるであろうか。……幕末の島原に桜木という名の遊女がいた。出自は明らかではないが四十首あまりの歌と数通の手紙を残している。手紙は、三河の国の国学者村上忠順とやりとりしたもので歌もほとんどが忠順編纂の歌集から見っかっている……」とこのように著しておられます。

桜木は京都島原の輪違屋に身を置き太夫とも天神ともいわれた才女でした。忠順との交流は大田垣蓮月を介し歌を通してのものでした。

桜木は忠順に教えを乞うていたでありましょう。後に桜木は髪を剃り尼となって蓮月のもとに身を寄せたといわれます。（桜木二十四才、忠順四十三才）

いえばへにいはまがくれを行く水のたぎつこゝろを人はしらずや

そぎすてしそのくろかみはをしまねどならはぬ袖のいろぞやさしき　桜木

神光院

さて、このように明らかになれば今回の歴史探訪は迷うことなく京都へということとなりテーマを次のように決め、十一月十日実施となりました。

テーマ「忠順の交友、大田垣蓮月尼・遊女桜木を偲び秋の京都へ」。

午前十一時予定どおり島原輪違屋着見学、輪違屋は元禄年間に創業し現在の建物は、安政四年（一八五七）に再建されたもので京都市指定有形文化財に指定され保存されています。

潜戸を一歩内に入るとそこはうす暗く二階へは吹抜けとなり太い桁は黒ずんで特徴のある造りに風格さえ感じさせられます。

太夫がさしたであろう片隅の古びた大きな緋傘に桜木を偲び忠順像を浮べ桜木が忠順に宛てた手紙の一節…うきつらきながれの里なれば……を思い出し島原を後にしました。

つぎの神光院へ予定どおり着く。あらかじめの連絡と、村上家からの連絡もあって寺では気をつかい蓮月焼や書など貴重なものを座敷に展示し、迎えて下さいました。

又、蓮月が晩年を過し、没したといわれる茶所も見学しました。

蓮月の墓は、寺より少し山手に入ったところにあり全員で急な坂みちを登り墓前に線香をたむけ一人づつ手を合せ冥福を祈りました。

かたむいた墓石には鉄斎の筆による「大田垣蓮月墓」と飾り気もなく刻まれていました。

大田垣蓮月墓

蓮月が生前から用意していた遺体を包む白木綿の布には次の二首が書かれていたといわれます。

ちりばかり心にかかる雲もなし
けふを限りの入相のそら

ねがはくはのちの蓮の花の上に
くもらぬ月をみるよしもがな

幕末に悲運な人生を送った文人蓮月の一生は栞のページをくもらせる侘しいものでありました。

さて時もすぎ最後の目的地、三千院へ向う。

たけなわな秋のひとゝきを思いおもいに古刹を巡り、今回のすべての日程を無事終えました。

以上五回の歴史探訪を回顧して。

表紙のことば

座右記は、小形大福帳一冊である縦一二センチ、横一七センチ、厚さ二、五センチ程の帳簿である。

表紙には、嘉永五壬子年、座右記尊祖父、忠順翁刈谷藩奉仕録、義保追記、村上氏と書かれている。

座右記・東征日記

東征日記下は、前号でも紹介したとおり、縦一二、二センチ、横一六、七センチである。

簗瀬先生は、次のように記しておられる。「東征日記下」とあって、前半にあたる部分を欠くのはすこぶる残念であるが、せめて残欠部なりと翻刻しておくことにしたい。

料紙は懐紙を二つ折にして重ねこれを更に左右に折って、横丁本にした仮綴じの草稿である。

表紙に「東征日記下」とし、それに並べて「西遊記行」とあるのは、明治九年の関西旅行の記録である。

座右記の表紙はやや厚い紙が用いられおり全体として傷みが見られよく使われていたことを物語っている。

東征日記下は、傷みもほとんどなくよい状態で保存されている。

編集後記

東征日記下の紹介は、会報第三号につづき今回で終了しました。

忠順は、有栖川宮より「御用之義有之」とて旅立った。ご用の義とはなんであったであろか、日記の中よりこれと明記はされていないが短歌や時代背景から察する外ない。

帰郷にあたり、別れをおしみ帰途についたが難儀な旅であったことが伺える。忠順翁の活躍をしのびつゝ。